

### 町工場の世界 : 小関智弘の町工場巡礼記の研究(5)

HAGIWARA, Susumu / 萩原, 進

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

72

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

2004-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003259>

# 町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究(5)

萩原進

## 目次

はじめに

### 第一章 労働倫理学の必要性

第一節 労働経済学における労働観の一面性

第二節 仕事と家族：浅田次郎作『鉄道員（ぼっぼや）』のメッセージ  
(第69巻 第4号)

第三節 ルター神学における〈職業〉と〈救済〉

第一項 人はパンのみに生きるにあらず

第二項 ルターのベルーフ論

第三項 ルター神学と労働研究

(第70巻 第1・2号)

### 第二章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その(1)

第一節 町工場に働く人々

第一項 町工場に注目する理由

(第70巻 第4号)

第二項 粋な旋盤工：小関智弘の横顔

(第71巻 第1・2号)

第二節 環境としての大森・蒲田

(以上 本号)

### 第三章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その(2)

第一節 旋盤工の仕事

第二節 ME革命と旋盤工

第三節 小関智弘の熟練論

むすび

## 第二章 小関智弘の町工場巡礼記の研究——その(1)

### 第三節 環境としての大森・蒲田

#### 第一項 企業社会と地域社会

##### 〔A〕 渡り職人と地域社会

小関さんは、1951年（昭和26年）3月に東京都立大学附属工業高校の普通科（文科）を卒業しました。大変奇妙なことですが、当時の都立大附属工業高校には工業高校であるにもかかわらず、普通科が置かれていたのです。学校内では、工業科は理科、普通科は文科と呼ばれていたそうですが、普通科の方は間もなく廃止されてしまいました。

高校卒業と同時に小関さんは、仕上工出身の“社長”のほかには従業員がたったの2人しかいない超零細な中小企業に就職することになりましたが、町工場の大半が従業員数10人未満の零細企業に過ぎなかった大森や蒲田においては、新規学卒者が零細な町工場に就職すること自体は、それほど珍しいことではありませんでした。

小関さんが新規学卒者として就職をした1951年の春頃といえば、前年の1950年6月に勃発した朝鮮戦争の影響を強く受けて、日本経済は活況を呈し始めていました。とりわけアメリカ占領軍がもたらしてくれた特需の刺激によって、工業部門は急速に復興を遂げつつありましたが、まだ敗戦の痛手から完全に立ち直ったわけではなく、日本全体としては相変わらずひどい就職難が続いておりました。

しかし京浜工業地帯の一角を占めている品川や大森・蒲田には、電機・機械・金属関係の大企業の工場が、目白押しに立地していたうえに、これら機械工業関係の企業が、米軍からの特需の恩恵にもっとも多く浴することができたわけですから、この地域の就職難は相当に緩和されてきていた

はずでした。特に工業高校の新規学卒者となれば、就職に苦勞するなどということはずありえなかったといえます。

小関さんは、品川や大森では名門工業学校として評判の高かった東京府立電気工業学校（電工）の出身です。電気工業学校（電工）は、昭和10年に8年制工業高校をめざして日本で始めて創設された公立の工業学校であり、現在の都立鮫洲工業専門学校（鮫洲の都立工専）の前身ですので、今でも工業高専・工業高校界では一の老舗で通っているわけです。まさしくその有名な電工の出身なのですから、小関さんにはもう少しまともな就職口があってもよさそうなものだ、と誰しもが訝しく思うにちがいありません。都立の工業高校卒でありながら、かくもちっけな零細町工場にしか就職できなかったのは、小関さんが普通科の出身でありながら機械工業の職場（機械工場）に就職しようとしたことに、主たる原因があったのではないのでしょうか。

東京計器、日本特殊鋼、東芝、日本光学などなどの地元の錚々たる大企業はいうまでもなく、中小企業といえども、“工業科”ならぬ“普通科”出身の若者を、わざわざ熟練技能工の卵として採用するなどということは、およそ考えられないことでした。高校を出て熟練工またはテクニシャン（技手）になるには、少なくとも機械科または電気科を出ていなければなりません。企業が、機械工場の技能職にわざわざ普通科の出身者をあてるなどということは、論外なこともしくは狂気の沙汰に近いことであったといつてよいでしょう。

戦後に機械工をめざした若者の多くは、少なくとも1960年代以前においては、新制中学（現在の中学校）卒業と同時に企業に臨時工（見習工）として就職し、まず見習工から機械工のキャリアを開始するのが一般的な慣行でした。若い見習工たちに、工場で技能を伝授してくれた先輩労働者の大半は、高等小学校または職工徒弟学校を卒業すると同時に機械工場に就

職し、工場徒弟（後の見習工）として約7年間の修行を積み重ね、修行が済むと更に1年間“お礼奉公”を果たして、やっと一人前の機械工になった人たちなのでした。戦前の日本では、男子たるものは（満20歳で）“徴兵検査を終えると一人前だ”などといわれておりましたが、それは徒弟（見習工）が年季明けを迎える年齢が、ほぼ徴兵検査の年齢に当たっていたからだと思われまふ。小関さんのように、高校卒でしかも普通科（文科）の出身でありながら機械工をめざした人は、当時としては非常に珍しい存在であったに違いありません。

小関さんは高校卒でしたから、15歳ではなく18歳で見習工になったわけですが、機械工のキャリアを歩もうとする者としては、いささか出遅れの感が否めません。しかも、1950年代において、ブルーカラーの職種に就いた人たちの最終学歴は新制中学卒が一般的であったわけですから、小関さんのような高校卒の機械工は極めてまれな例外的な存在であったといえます。もしかすると小関さんは、常に周りの労働者から、“インテリ臭のする変わった労働者”（変わり者）と見なされていたのではないのでしょうか。しかも小関さんは、高校時代に生徒会の会長を引き受けたりして、校内では誰ひとり知らぬ者のいない左翼の活動家でしたから、優良企業に就職するのは難しかったのかもしれませんが。周囲から“アカ”のレッテルを一旦貼られてしまうと、まともな企業への就職はほとんど不可能になってしまうほど、左翼には厳しい時代だったからです。

ともあれ、高校卒の見習工として町工場に就職した小関さんは、ひとまず機械工のキャリアの出発点に立つことになりました。最初の勤め先の北村製作所の工場は、大森にあった小関家の住居からそれほど離れてはいませんでした。工場は、品川区を流れる目黒川が京浜運河に注ぐ河口近くにあり、前述したとおり社長と従業員が2人だけの文字通りの町工場に過ぎませんでした。小関さんが見習工に採用されたことによって、従業員はや

っと3人になりました。面白いことに、機械工場の見習工でありますから、いずれは将来機械工になることが予定されていたのは確かなのですが、見習工になった時点でもまだ、職種が具体的には決まっていませんでした。一口に機械工といってもその中には、仕上工、組立工、研磨工、旋盤工、フライス盤工、金型工（プレス工）、工場板金工など、実に多種多様な職種——英国ではトレード（trade）といわれている——が存在します。小関さんは、機械工の様々な職種のなかから、どのようにして旋盤工という職種（トレード）を選択したのでしょうか。小関さんの回想記によると、旋盤工のキャリアに進むことを決めたのはまったくの偶然によるというのです。

機械工業の町工場には、仕事のやりかたについて、町工場特有の労働慣行——英国における制限的労働慣行（restrictive labour practise）のごときもの——が存在しています。熟練工が専用で使用している工作機械には、同じ職場の熟練労働者であっても、絶対に手を触れてはならないという慣行もそのひとつです。ある熟練工が所用のために欠勤した場合、その熟練工が使っていた工作機械も封印されて一緒に仕事を休む、これが町工場の掟なのです。しかし見習工には、専用の機械や道具はもとよりのこと、決まった作業机さえも与えられないのが普通です。（見習工に与えられる専用の空間としては、着替えを入れておくロッカーのみといっても過言ではありませんでした。）

小関さんの場合運が良かったのでしょうか、見習工になったときに、たまたま前任者が使っていた古い機械が1台空いていたために、それを使うことが許されたというのです。

その空いていた機械が、たまたま旋盤であったがために、小関さんは旋盤工の道を偶然歩み出すことになってしまった、というのです。

人は含羞の故に、自らの過去を極端に戯画化したがる傾向があるといわれています。確かに小関さんが書いたものの中にも、太宰治の『人間失格』ほど強烈ではないにしても、自己を戯画化したがる作家特有の性癖が見え隠れしています。小関さんが旋盤工になったのは、小関さんが主張しているように、まったく偶然にそうってしまったのでは断じてありません。小関さんはしっかりと熟考を重ねたうえで、自分で旋盤工になる道を選び取ったに違いない、とわたくしは信じています。

たまたま旋盤が1台空いていて、2人いた先輩労働者がいずれもたまたま旋盤工であったがために、見習機械工として受けた訓練もまたたまたま旋盤工の訓練になったのだ、という小関さんの回想は、確かにすべて事実に基づく回想であるかもしれませんが、しかし、もしも旋盤工の仕事が自分にはまったく適していないと思った時に、ただちに他の職種に変更することなど、若い時分には容易にできたはずであります。であるにもかかわらず小関さんは、その後職種を一度も変更することなく、旋盤工のキャリアをまっすぐに歩み続けてきたことを考えてみますと、やはり小関さんは、旋盤工の仕事が好きであったが故にこの道を主体的に選び取ったのだ、と考えるのがもっとも自然な推論といえるのではないのでしょうか。

【(小関さんの好きな)旋盤工仲間に伝えられてきたフォークロア(俚諺)】

日本の機械工の世界において占めている、旋盤工の高いステータスと華麗なイメージは、以下の川柳まがいの伝承句の中に、見事に表現されていると思われます。

“粋な旋盤、小粋な仕上げ、バカでもできるターレット”

\* 昔日本の刑務所において、受刑者たちの間で口伝えに言い伝えられてきた俚諺に、こんな俚諺があったそうです。

“粋なスリ師に、小粋なのび師、強盗・強姦馬鹿がする”(のび師は

コソ泥)

戦前の若かりし時代に、社会運動のかどで刑務所を転々とした経験を持つ労働運動家・伊藤憲一の自伝『南葛から南部へ——解放戦士別伝——』（医療図書出版社、昭和49年）84頁を参照。

北村製作所における小関さんの見習工としての勤めは、たったの3ヶ月で終わってしまいました。先輩の旋盤工とのトラブルが離職の原因だったようです。このわずか3ヶ月の見習修行が、実は小関さんの職業的生涯にとって非常に重要な意味をもっているのですが、その点については後に詳しく検討する予定ですので、これ以上の言及はここでは控えておくことにします。

1956年の7月に北村製作所を退職した小関さんは、馬込の夫婦坂（めおとぎか）に沿ったところにあった昭和国産という会社——後の大同精機、この会社はその後茨城県と福島県に工場を移転させ現在も操業しているという——に再就職をします。昭和国産は、町工場としては比較的規模の大きい工場だったようで、従業員が30名ほど働いていました。機械工場、組立工場、板金工場の3工場の他に鍛冶場（かじば）を備えており、旭精機（後のリコー）や日本光学など地元の大企業からの注文を受けて、主として部品生産の下請をやっていたわけですが、自社製品も作っている比較的独立性の強い中小企業でありました。昔の乗用車には、今のウィンカーの役割をしている方向指示器というものが左右に付いておりましたが、有名な“アポロ”という名の方向指示器を作っていたのが、ほかならぬこの会社であったそうなのです。

小関さんは、昭和国産に4年間勤めた後に、1955年に京浜建設工業に移動しますが、この4年間に旋盤工に必要な技能の大方を習得して、見習期間を終了したようです。戦前に行われていた技能検定試験は、1955年にはまだ復活していませんでしたが、もし復活していれば、小関さんは、少

なくとも2級技能士（旋盤工）の資格を取得できる位の力をつけていたのではないかと思われまます。

1955年に昭和国家産を辞めてから1965年に扶桑製作所に就職するまでの約10年間、小関さんは“渡り職人”のように、町工場から町工場へと転々と職場を変えていきました。1956～57年の約2年間勤めた京浜建設工業は、工場労働者に対して能率給（出来高給）で賃金を支払っていた会社でしたので、高い出来高給を稼ぎたい労働者にとっては打ってつけの職場でありました。しかし、あまりにも頻繁に賃率（標準単価）の切り下げが行われたために、出来高払い労働者の怒りを招いてしまい、遂に労働組合が結成されるに至りました。団体交渉の決裂、ストライキとロックアウトの応酬、といった中小企業ではめずらしい労働争議が、京浜建設工業で起こってしまったわけです。若き旋盤工の小関さんは、労働組合の結成やストライキなどにおいて、積極的に旗振役を務めましたので、それがもとで会社にならまれてしまい遂に解雇されてしまったのです。

- \* 町工場に働く機械工は、工場の雰囲気と労働条件に納得している場合には、意外に長期雇用を好みます。しかし、工場の雰囲気や労働条件に不満を感じた場合には、労働組合運動よりも労働移動（“渡り”）を選ぶ人が圧倒的に多いといえます。

小関さんは、解雇されてからしばらく失業保険で生活をしながら、再就職の機会をうかがっていたのですが、大森の職業安定所から求人や採用の通知はなかなかやって来ませんでした。京浜建設工業での労働争議のことが、響いていたのでしょうか。ほどなく東京計器の入社試験を受けてみたところ、恐ろしく高い応募倍率であったにもかかわらず、小関さんは見事に合格することができました。しかし当時の雇用慣行もあって、採用時の身分は本工ではなく臨時工でした。一人前の旋盤工が、24歳にもなって東京計器の臨時工として採用されるというやや屈辱的な再就職ではありまし

だが、大森・蒲田の機械工たちにとってはあこがれの的ともいえる大企業の東京計器に就職できたのですから、小関さんの胸も希望でふくらんでいたに違いありません。しかし3ヶ月後に、会社の人事部に呼び出されて言い渡されたことは、(アカなるが故に) 本工採用はできないという冷たい仕打ちでありました。総評全国金属の左派組合であった東京計器労働組合も、臨時工の雇用保障にはまったく冷淡であったようで、本工への昇格を組合として積極的に推進してはくれなかったようです。

あこがれの東京計器を追い出されてしまった小関さんは、1957年に、呑川沿いにあった町工場の東一製作所にやむなく再就職し、ここで約7年間旋盤工として働き続けました。しかしまともな労使紛争がもとになって、退職を余儀なくされてしまいます。1964年に賃金引上げをめぐる交渉がこじれ、社長との人間関係がしっくりいかなくなり、小関さんは、退職金も受け取らずに、辞表をたたきつけてサッサと退職してしまったのです。このあたりに、小関さんの生一本な“江戸っ子”気質と父親譲りの“魚河岸”風の振舞い振りが、よく現れているといえないでしょうか。東一製作所を退職した後小関さんは、在日朝鮮人が経営する胡散臭い怪しげな町工場で働いたりしましたが、いずれも長続きせず、町工場を転々としていたようです。

小関さんの“渡り職人”風の生き方に最終的にピリオドが打たれるのは、1964年に日本特殊鋼(日特)の下請企業であった扶桑製作所に再就職してから以降のことであるといつてよいでしょう。扶桑製作所は、日特とともに歩んできた社歴の古い企業だったのですが、1976年に日特が倒産(大同製鋼に吸収合併)すると同時に連鎖倒産を余儀なくされてしまい、そのあおりを受けて小関さんたち従業員も全員職を失うことになってしまいました。しかしこの時の退職は、それまでの“渡り職人”風の“渡り”とはまったく異なります。小関さんは、1964年に“渡り”をやめ、1976年に会社が倒産するまでの11年間、従業員20名たらずの町工場にすぎなかつ

た扶桑製作所で、黙々と旋盤のハンドルを握り続けたのです。

1951年4月に北村製作所の見習工になってから、1964年に扶桑製作所に就職するまでの約15年間、18歳から33歳までの間に、小関さんは、主として中小企業の町工場を中心に、約7～8社ほど“転々”と移動を繰り返しておりました。このように、企業から企業へ“転々”と頻繁に移動する労働者のことを、“渡り職工”（あるいは“渡り職人”）とっておりますが、小関さんは30歳代の初頭までは、“渡り職人”であったといっても過言ではありません。

小関さん自身、自らを“渡り職人”の人生を生きた人間として自己確認しています。以下の文章は、小関さんが、山形県寒河江市（さがえし）にあるマイスター社の招きに応じて現地で行った講演『旋盤工暮らしの四十八年間から学んだこと』の冒頭の一節からの引用です。

「ご紹介いただきましたように、この48年間ずっと東京の大田区の町工場を渡り歩いてきた旋盤工です。かたわら多少はものを書くのが好きで、工場のお話を小説やエッセイに書くので、作家と呼ばれることもあります。根っからの旋盤工です。

48年間旋盤工をしてきて、とりわけわたしが訴えたいことは、ものづくりには欠かせない技能、熟練というものの大切さです。技能や熟練は、現場を離れては語れません」（『世界を超える町工場技術報告』、238頁）

「この48年間ずっと東京の大田区の町工場を渡り歩いてきた旋盤工です」——こんな風に小関さんは、自らを“渡り歩いてきた旋盤工”としてアイデンティファイしているのです。しかも“渡り歩いてきた”地域とは、東京都や神奈川県のような広い地域ではまったくなく、“東京の大田区”というまことに猫の額のように狭い空間に過ぎませんでした。

小関さんは、現在の大森北（町）に魚屋の次男坊として生まれ、家のすぐ近くにあった入新井第一小学校（現在の名称）を卒業した後地元の鮫洲電気学校に進学し、昭和26年4月に同校を卒業して以来70歳で引退するまで、旋盤工として、大田区の町工場を転々と“渡り歩いて”きました。しかし小関さんは、自宅からの通勤時間が片道30分を超える企業に就職したことは一度もありませんでした。18歳で北村製作所の見習工になってから、70歳で東亜工器を引退するまでの50年の間に、少なくとも10回ほど“渡り”を経験し、自ら“渡り職人”であると自称している人なのですが、実は、自宅からの通勤時間が30分を超える工場で仕事をした経験がまったくなく、江戸時代の町人のような地元密着型の人生を生きてきた人だったのです。まるで、ワーグナーの『ニュルンベルグのマイスター・ジンガー』に出てくる靴職人のマイスターのようではありませんか。ニュルンベルグの製靴マイスターは、町工場の親方（マイスター）であると同時に靴屋という小企業の社長（自営業者）でもありますから、仕事を求めて他の都市に引越しをするなどということはありません。小関さんは熟練工なので、時には大田区の外に職を求めることがあっても何の不思議もありえないわけです。しかしながら小関さんは、50年間、大森・蒲田の外に職を求めることを一度もしませんでした。

小関さんの職業的生涯は、旋盤工としてのキャリアという縦糸と、東京都大田区の町工場群という横糸で織られた、日本社会では数少ない数奇な生涯であったといえるでしょう。家庭生活と職業生活の双方が、ともに町工場が密集する大田区の城南地域を舞台にしながら展開されていきました。その意味で、生涯ニュルンベルグの城壁の外に出たことがなかった靴屋のマイスターと、非常によく似た職業的生涯であったといっても過言ではありません。

小関さんの作品を読みながら、いつも考えさせられることは、作品に登

場するほとんどすべての人物が、労働によって暮らしを支えながら、決して背伸びをせずにつつましく生きていこうとしているのですが、仕事に対しては妙なこだわりを持っていて、採算を度外視してつい仕事に熱中してしまいがちな職人気質の人たちである、ということです。小関さん自身もそうなのですが、小関さんが書いた町工場巡礼記に登場する人々、すなわち町工場で働いている“職人”や“熟練工”あるいは町工場の“社長”たちは、いずれも、ドイツの職人やマイスターたちに見ることができる、生まじめで、仕事好きで、家庭的で、自分が生まれた町で仕事をし続け同じ町で静かに生涯を終えていく地味な人間像と、ぴったり重ね合わせることができるのです。マックス・ウェーバーが、“資本主義精神”の担い手として念頭に描いていたのは、きっとこのような、仕事を生きがいとして生きていた、禁欲的で敬虔なプロテスタントの職人やマイスターたちだったのではないのでしょうか。

大森や蒲田には、仕事の間である職場と生活の間である住居がともに同一地域の中にあり、地域にどっしりと根を下ろして生活を営んでいる労働者がたくさん住んでいます。このように職場と住宅が近接した距離にあって、住宅と工場が混在しながら地域共住体（コミュニティー）を形成している場合、その場合に始めて、生産の間と消費の間が空間的に分離していない農村のような町を、都市の中に再生することができるのではないのでしょうか。もしかするとそのような産業都市、あるいは都市工業の中に、失われてしまった人間存在の総体性を取り戻す可能性が存在している、といえるのかもしれませんが。

小関さんがこれまで暮らしてきた世界は、半径4kmの円内に完全に収まってしまうほどの、まことに小さなマイクロコスモス（小宇宙）に過ぎませんでした。わたくしは、人間が、小宇宙の中に生まれて小宇宙の中で仕事をしながら暮らしていく生活を、経済地理学の用語法を借用して、生活の“ローカリゼーション”〔localization〕と呼ぶことにしたいと思います。

そしてこれからしばらくの間、仕事と家族の関連〔work-family relation〕を地域という角度から検討を加えることによって、いささか大袈裟ではありますが、今日の日本が直面している諸問題の解決策を模索し、人間存在の条件を探っていきたいと思っているのです。

### 〔B〕産業集積論のヒント

東京城南の大森・蒲田地域は、大阪府の東大阪市と並んで、中小金属機械工場の巨大な集積地として有名な所です。大田区はこの巨大な工業集積を、自ら“ナショナル・テクノポリス”と名づけることによって、この地域の中小企業が有するダイナミズムと技術力の優位性を誇りにしてきました。

大田区には、ピーク時の1988年に、9190もの製造業事業所が操業をしておりました。その後バブル経済が弾けて以降、“失われた10年”と揶揄される10年もの長期に及ぶ景気低迷のもとで、工場数は急速に減り続けていき、2000年には6000工場を切るまでに減少してしまいました。東京城南の巨大な工業集積は、1988年を境にして、集中傾向から分散傾向に基調を転じたといつてよいでしょう。現在城南の工業集積は、放置すれば工場数の減少によって自然死しかねないほど、危険な状況にあるといえるのかもしれませんが。製造業の空洞化と工業集積地の衰退問題は、現在の日本が直面している難問中の難問といえる重要問題と思われませんが、別の機会に詳しく論じることにしてこれ以上ここで論ずることは致しません。

\* 以下に述べるような理由によって、大田区の産業集積は予想以上の速度で変化しつつあります。一端形成された工業集積といえども、当該地域を取り巻く環境の変化とともに、大きな変貌を余儀なくされていくであろうことは、十分に予想されていたことです。例えば1970年代には、騒音や悪臭などの公害の発生源であることを理由にして、多

くの町工場が、埋立地に造成された工業団地に追い出されていきました。住工混住の工業集積地においては、公害問題は工場操業上のアキレス腱になってしまいます。しかし城南の工業集積は、平和島・城南島・京浜島などの隣接した埋立地へ公害型の工場を移転させることによって、かろうじて集積を維持することができたのです。

しかし1985年のプラザ合意以後、大田区の町工場の世界を根底から揺るがすような新しい環境の変化が起きました。それは、地震のような一過性の変化とは違った、対処が非常に難しい変化であるといえます。以下に、それらの諸変化の一部を列挙しておきましょう。

#### 【城南地区の工業集積を揺るがす環境の変化】

- (1) バブル経済：大田区内の準工業地帯の地価が大幅に上昇した
  - (a) 大田区内での工場の立地や開業が著しく困難になった
  - (b) 工場跡地を利用したマンション業への転換が加速された
- (2) 円高：プラザ合意以後の急激な円高の影響
  - (a) 大企業の部品調達方式の変化：下請サプライヤーの整理、グローバル・ソーシングへの移行などによって、2次下請・3次下請が多い町工場は、急速に仕事を失ってしまった
  - (b) BRICsの台頭：特に中国・東南アジアへの直接投資の急増
- (3) 労働力の供給制約：農村からの労働力供給が枯渇し、外国人出稼ぎ労働者への依存が深まりつつある
  - (a) 農業人口の減少、少子高齢化などによって、若年労働力の給源が細くなり、事業主の後継者を含めて労働力の確保が困難になっている
  - (b) さまざまな理由によって、高校教育の中での工業高校の人気は最低に低下し（普・農・商・工）、機械工のなり手がなくなりつつある
  - (c) ベビー・ブーム世代が中高年層入りするとともに、1980年代半ば

頃から自営業の開業率が廃業率を下回るようになった

戦後大森・蒲田の中小企業は、戦災からの復興に続いて息の長い高度経済成長がやってきたために、景気循環の波に揺さぶられはしたものの、まことに順調な発展を遂げてきたといえるでしょう。大田区内の製造業は、企業数、従業員数、出荷額のいずれにおいても、常に東京都23区内でトップの座を占め続けてきました。しかも、世界に冠たる工業国日本の工業集積の模範例として、内外から多大な注目を集めてきました。

城南の工業集積が、工業集積の模範例と見なされる理由は、以下の通りです。

【城南地区の工業集積】（そのモデル性：modality）

- (1) 網羅性：機械工業は、部品・素材・治工具などの様々なサポート業種が裾野にあって支えてくれることによって、成り立っていける総合的な産業といえるでしょう。城南地区の工業集積は、金型・治工具・切削加工・メッキ・塗装・熱処理・鍛造・鑄造・プレス・板金・溶接・製缶など、機械工業が必要とする基盤的技術のほとんど全分野を網羅しているのです。
- (2) 企業者精神：中小企業の熟練工であった人が中年になって独立して企業家に転じたり、大企業で働いていた技術者やテクニシャンが大企業からスピノフして起業する場合、城南地域に立地するケースが大変多かったといわれています。これら町工場の“社長”たちは、企業者精神〔entrepreneurship〕がすこぶる旺盛であり、技術開発力も高かった。

〔例〕 蒲田の谷啓製作所の社長谷内啓二さんは、金型工出身でしたが、早くから独立して金型屋をやってきました。タニケイさん

は、缶切りを使わずにタグを引っ張っただけで空けることができる缶詰の蓋を、大企業の技術者や大学の工学部の教授たちでも開発できなかったことを知って、一念奮起し、プルトップ缶の技術開発に取り組むことを決意したのです。5年の歳月をかけて遂に開発に成功し、現在その特許——業界ではタナカイのプルトップ缶と呼ばれている——は、世界中で利用されています。初等教育しか受けていない金型屋のタニケイさんの、このすさまじいまでの企業家精神を支えているものは、いったい何なのでしょう。

- (3) 外部労働市場：1960年代の中頃まで機械工志望の若者の多くは、東京の城南もしくは川崎市にやってきて町工場の見習工になり、一人前の熟練工に成長すると、しばらく工場間を“渡り”歩く、いわゆる“渡り”によって技量を高めながら、将来の独立を夢見て懸命に働いて貯蓄するのが普通でした。企業が倒産して失業を余儀なくされた場合にも、他の町に移動せずに城南地区の企業に再就職するのが一般的であったといえます。長い労働生活を、城南地区内で過す人が圧倒的に多かったわけです。2万人以上もの熟練機械工によって、城南の地域的労働市場は形成されていたのです。
- (4) 住工混在：典型的な町工場は、建屋（たてや）の二階が工場主の住宅に当てられ建屋の一階が工場であるというタイプか、または、敷地内に建物が2棟あって1棟が住宅もう1棟が工場というタイプかのいずれかでありました。住宅なのか工場なのか判然としない、というのが町工場の特徴なのです。しかし住工混在の“準工業地帯”には商店や呑み屋などはわずかしかありませんでした。遊技場・呑み屋・飯屋・商店などが密集するいわゆる繁華街（盛り場）は、準工業地帯からやや離れた場所、駅の周辺などに多くありました。

近年我が国において、産業集積〔industrial cluster〕の研究が活気を帯びてきていますが、産業集積への関心が何故にこれほどまでに高まってきたのか、たいへん興味のある現象だといってよいでしょう。その理由は判然とはしませんが、人々が足元の“我が町”にも次第に関心を向けるようになり、鎮守の神を祭るお祭りが年々盛んになってきている最近の傾向と、どこかで連動しているのかもしれませんが。

他方製造業のいわゆる空洞化に伴って、産業クラスターが同時にガタガタと音をたてて解体していつてしまうのではないかと心配する人が増えてきているのも事実です。関満博『地域経済と中小企業』（筑摩書房、1999年）、同『空洞化を越えて』（日本経済新聞社、1997年）、あるいは小林英夫『産業空洞化の克服—産業転換期の日本とアジア—』（中公新書、2003年）などの最近出版された書物においても、揺らぎ始めた工業集積を空洞化問題と関連させながら議論しています。わたくしもまた、日本の製造業が生産拠点を海外に移していくにつれて、国内の製造業は徐々に空洞化していかざるをえないかもしれない、そうなった時、産業集積のモデルといわれた東京城南の産業クラスターもまた、臨終の時を迎えることになるかもしれない、と危惧しています。

しかしながら製造業の空洞化に関しては、上述した書物に展開されている悲観論に対して真っ向から批判を加えようとする意見も多数提起されてきています。唐津一『産業空洞化幻想論』（PHP 研究所、1994年）、中沢孝夫『中小企業新時代』（岩波書店、1998年）などの書物においては、そもそも製造業の空洞化などといった現象そのものが日本には発生していない、といった類のいささかショックな意見さえ開陳されているのです。

それはさておいて、これまで繰り返し述べてきたように、空洞化の問題は本稿のテーマではありませんので、これ以上の言及は控えたいと思います。中小企業の産業クラスターに対して、わたくしが長らく抱き続けてき

た問題意識は、空洞化の問題とはまったく関係なく、それとは別の所にあります。中小企業の産業クラスターは、もしかしたら、職場と家庭、生産の場と消費の場を同一地域内に統合することによって、自立性をもった産業都市型のコミュニティーの形成を可能ならしめるのではなかろうか、という点にあります。すなわち中小企業の産業クラスターは、地域の労働市場の形成を通して新しい産業的都市社会を生み出し、江戸時代後期の江戸の下町を特徴づけていた、町人（労働者+小経営者（親方）+商人）を中核にして営まれる賑やかで粹なコミュニティー形成の酵母になりうるのではあるまいか、と期待しているのです。

城南地域に現に形成されている産業クラスターは、将来どのように変貌していくのでしょうか。城南の産業クラスターの未来像を考えるにあたって、あらかじめ予備知識として持つておかねばならないのは、産業クラスターに関する包括的な理論であります。

1980年代に入りにわかに脚光を浴び始めた理論に、“戦略的貿易政策論”なる理論がありました。MIT時代のバグワッシュ教授の弟子であった、ポール・クルーグマンやローラ・タイソンなどが言い出した新貿易政策理論のことです。彼らは日米通商摩擦に対して、先生であるバグワッシュ教授が取った態度、すなわち教授が、アメリカ政府の保護主義への傾斜と日本叩きに厳しい批判を加えたのとは対照的に、アメリカ政府の保護主義を積極的に擁護し、戦略産業の育成を目指した戦後日本の産業政策をアメリカ政府も模倣することによって日本に対抗せよ、と主張したのです。彼らの政策的主張を背後から支えていたのが、他ならぬ戦略的貿易政策論であったわけでありませう。

\* 戦略的貿易政策の理論は、1980年代の初頭に、ジェームス・ブランダー（James A. Brander）やバーバラ・スペンサー（Barbara Spencer）らによって提起され、一時期、戦後日本の産業政策とともに経

済論壇をにぎわす流行のトピックスとなりました。しかし、この政策理論を各国政府が実際に適用すべきか否かといった問題になると、理論は支持するが応用には反対といった慎重派が多数を占めているといえます。例えば、タイソンは理論の応用にたいしてもポジティブであるが、クルーグマンは理論の応用に対してはネガティブでした。

周知の通り国際経済学の中心理論の位置は、リカードの比較優位の理論と自由貿易論によって占められてきましたので、当然のことながら国際経済学の標準的教科書においては、比較優位の理論に多くのスペースが当てられてきていました。従って、規模にかんする収穫逓増などの供給独占につながる特殊なケースに関しては、周辺的なトピックとして軽く扱われる程度に過ぎなかったわけです。そんな中で周辺的な理論に過ぎなかった不完全競争論に着目し、これに戦略的貿易政策理論という新しい衣装を着せて、国際経済学の新理論として華々しく登場させたのが、他ならぬクルーグマンやタイソンなどのバグワッシュ教授の門下生たちだったわけです。

ローラ・タイソンは、日本の通産省の“戦略産業”育成政策（産業政策）に対抗して、アメリカ政府も国内の半導体・コンピュータ産業を“戦略産業”として保護し育成せよ、と主張し続けました。そしてシリコンバレーのような高度技術の産業集積を、政府と民間が一体となって発展させる必要性を強調したのです。この政策提言は大きな反響を呼び起こし、1980年代から1990年代にかけて、アメリカにおける経済政策論争の争点となっただけでなく、アメリカの各地にシリコンバレーのミニャチャーを作り出す契機になったともいえます。

何ゆえにタイソンは、アメリカ経済学会では無視されてもよいほどの少数意見に過ぎない保護主義擁護論に、これほど加担してしまったのでしょうか。バグワッシュ教授は、“ローラは、西海岸のハイテク産業の代弁者になってしまったのだ”と嘆いておられましたが、戦略的貿易政策論の影響を無視することはできないように思われます。

戦略的貿易政策論の基本的命題は、以下の通りです。17世紀の初頭に、東日本の江戸（徳川方）と西日本の大坂（豊臣方）が、日本の経済覇権をめぐる競争に勝ったといたしましょう。どちらが経済覇権を握ることに成功するのでしょうか。大坂でしょうか、東京でしょうか。覇権の帰趨は、どちらが先に巨大な産業集積——例えば鉄砲工業を中核にした総合的な機械工業のクラスター——を創り出すのに成功したかにかかっています。規模の経済性に支持された国際競争力のある産業を、先に創出した方が勝利者になることができます。そのために徳川方も豊臣方も、巨大な産業集積を形成するための政策を、立案し執行していかなければなりません。先に集積を形成できれば、勝利者になることができます。

豊臣方が、堺の鉄砲工業の集積を先行して構築していて、圧倒的な競争力をもった独占を形成していたといたしましょう。この豊臣方の市場独占に対抗して、徳川方も城南に鉄砲工業の巨大集積を構築する戦略的貿易政策を採用することになりました。徳川方は、城南の鉄砲企業に巨額の補助金を出し、市場で鉄砲の安売りをさせることによって、堺の鉄砲企業に壊滅的な打撃を与えることに成功したのです。それ以後城南の鉄砲企業は、独占的な超過利潤を独り占めすることができるようになりました。

何故なのでしょう。規模に関する収穫逓増が成立する世界においては、一社による市場独占が成立しうるからです。同様に産業集積に伴う規模の経済性は、 $1+1=2$ ではなく $1+1=5$ のような、謎のような経済効果を生み出すことができます。先に産業集積の形成に成功した側は、圧倒的に高い国際競争力を握ることができます。

$1+1=5$ のような産業集積の謎めいた経済効果を発見し、集積効果に関して始めて経済分析のメスを入れたのは、かの有名なマーシャルにほかなりません。

マーシャルは、『経済学原理』の第4編第10章のある箇所、こんな興

味深いことを指摘しています。

「国々の経済的進歩を規制する諸原因の探求は国際貿易論に属しており、本章の範囲をこえている。ここで産業立地の大きな動向から眼を転じて、工業都市ないし人口稠密な産業地帯という狭い地域に集合してきた熟練労働者のグループがどのような道をたどっていくかを研究してみることにしよう」（馬場啓之助訳，II，271頁，馬場訳には不適切な訳語がところどころ見受けられるので、本稿においては、後述の山本訳を用いた。）

“国々の経済的進歩を規制する諸原因”とは、要するに産業の国際競争力を支える生産性のことであります。何故、A国の生産性の伸び率がかくも高いのに対してB国のそれはかくも低いのであろうか。説明変数は、物的資本や人的資本への投資額、科学技術の進歩の速度、様々なインフラストラクチャーの充実度、天然資源の新発見などの自然の恩恵などなど、きりがなほど多数にのぼります。その中でマーシャルが特に重視したのは、規模の経済性なのです。マーシャルは、前掲書の第4編第9章の末尾で、次のように述べています。

「われわれはある種の財の生産規模の増大に由来して起こる経済を二つに区分してさしつかえないように思う。——第一は、産業の全般的発展に由来するものであり、第二は、これに従事する個別企業の資源、その組織その経営能率に由来するものである。前者を外部的経済〔external economies〕、後者を内部的経済〔internal economies〕と呼んでよかろう」（前掲書，266頁）

外部経済とは、“ある特定の地区に同種の小企業が多数集積すること、すなわち産業のローカル化〔localization of industry〕と呼ばれている現

象” のことである、とマーシャルは明白に規定しています。

集積によって生まれる外部経済とは何であろうか。この点については、本学経済学部と同僚で気鋭の経済地理学者である山本健児教授が、論文「P. クルーグマンと A. マーシャルの産業集積論」(九州大学経済学会『経済学研究』, 第67巻, 第4・5号, 平成13年5月)において、見事なまでに緻密に整理されているので、この論文を参照してもらうことにしたいと思います。わたくしは、集積の外部経済に関するマーシャルの分析のうち、特に以下の4点を重視していきたいと思う。

#### (1) 生産規模の経済性

個々の小企業は、企業レベルの生産規模は小さいのですが、小企業が多数集まると集積効果が生じて、大規模生産と同様の効果が発生します。その場合、例えば特殊な仕事しかできない小企業でも、最適操業度を維持するのに必要な需要を十分確保することができますので、企業として存続していくことができます。あるいは、高価な機械を導入しても、需要の確保が比較的容易なので減価償却は可能であり、設備投資の危険(リスク)はそれほど高くはなりません。ローカリティ(地域)全体が、規模の経済性を生み出すからです。

城南では、一企業の生産能力を超える受注量であっても敢えて受注してしまう企業が多いのですが、それは、生産能力に余裕のある地域内の親しい企業に応援をしてもらうことによって、過大な受注量をさばいてしまうことができるからです。(横請とか仲間廻しといわれている慣行)

#### (2) 相互学習の効果

城南には、例えば下丸子の工和会のような、町工場の“社長”たちの社交クラブが無数といってよいほど多数存在し活動しています。で

すからビジネスや技術に関する新情報は、寄合の場やインターネットを通じて、それこそアッという間に地域内に伝わっていきます。集積地では、マーシャルが指摘している通り、「よい仕事は正当に評価される。機械、生産工程、ビジネスの一般的組織に関する発明と改善は、その功績がすばやく議論される。もし一人の人がアイデアを発すれば、ほかの人たちによってそれが取り上げられ、彼ら自身の提案と結合される。かくして更なる新しいアイデアの源泉となる」(同271頁)からであります。

### (3) 外部労働市場の利用

小企業といえども、小部分ではありますが、勤続年数の長い定着労働力を保持している場合が多いのですが、一般的には外部労働市場に依存する割合は高いといつてよいでしょう。産業集積地には、相当量の雇用機会が常時存在していますので、熟練工はこの地域から、よほどのことがない限り離れようとはいたしません。雇用主にとっても、地元の求職者の中から熟練工を採用するほうが、調達コストが安くすみしますので、常に外部労働市場を頼りにしています。城南では、職業安定所は比較的活発に利用されていますし、景気のよい時には、“旋盤工を求む”のビラやポスターがいたる所にベタベタと張ってあるのを見かけることができます。

### (4) 労使関係の安定性

マーシャルは、中小企業の集積地では、協力的な労使関係が成立し易いことに注目しています。

「経済発展の最初の段階を除いて、局地化された産業は、熟練にとっての恒常的市場を提供するという事実から大きな利益を獲得する。雇用主側は、必要とする特別な技能を持つ労働者を自由に選択できる場所を頼りにする傾向を持つ。他方、雇用を探する人々は、当

然のことながら、自分の技能を必要とする雇用主がたくさんいる場所に、それゆえよい市場を見出せそうな場所に行くことになる」と述べた上で、さらに「ここでは、社会的な諸力が経済的な諸力と協同する。雇用主と被雇用者との間には、おうおうにして強力な友好関係が存在する。しかし、どちらの側も、両者の間に不愉快な事件が発生する場合に、互いに対して摩擦し続けざるを得ないと感じるようにはなりそうもない。古い関係が面倒になれば、この古い関係を容易に破棄することができることを両者は望む」(同、272頁)と指摘しているのです。

城南の中小企業や町工場では、“親父（おやじ）運がよい”とか“親父運が悪い”といったことがよく言われてきました“社長”が、好人物で面倒見がよい人だと、従業員は得をするのですが、逆だと損をすることが多いので転職したほうがよい、ということをこれらの言葉は意味しているのです。町工場の雇用関係においては、労使間に強い信頼関係〔マーシャルは friendship と表現している〕が存在していますので、大企業以上に安定した協力的労使関係が形成される場合が多いといえるでしょう。労使関係がこじれてしまった場合にも、労働者は鉢巻姿でストライキを決行することよりも、労働条件のよい別の企業に労働移動していく“静かなストライキ”の道を選ぶことになるでしょう。外部労働市場の存在が、中小企業における労使関係の安定を補完してくれているのです。

規模の経済性に関して、経済学者は常に注目をしてきましたが、関心は主として規模の内部経済に向けられていました。内部経済に偏した研究が、経済学の伝統を支配してきたわけですが、このような偏向に対抗して、“市場”という制度そのものの経済性に注目してきたイギリス経済学の伝統に立ち戻って、経済学者の眼を再度外部経済に向けさせたのが、

マーシャルなのでした。

マーシャルが指摘している工業集積の外部経済効果の中で、わたくしが最も重要と考えているのは、地域の労働市場の外部経済に他なりません。地域の労働市場は、たんに工業集積を支えるインフラストラクチャーの役割を果たしているだけではありません。最近、情報のスピルオーバー効果であるとか、ネットワーク外部性であるとか、シナジー効果などといったことに注目が集まっていますが、これらの経済学的分析用語のすべてを統合してわたくしは、地域の労働市場が生み出すネットワーク外部性と外部経済の効果を、仕事を生き甲斐とする近代人のエートスの形成と表現したいと思うのです。

大森と蒲田の町工場には、“もの造り”という確かな手ごたえのある仕事に生きることによって得られる生の充実感や達成感について、熱い思いを込めて語り続けてきた小関さんのようなタイプの熟練機械工が、たくさん働いているのを見ることができるよう。小関さんは、50年にも及ぶ長い労働生活の中で、失業や労働争議のような辛い体験を何度となく味わされたにもかかわらず、この世界から脱出しようと試みたり、城南地域の外に出ていこうとはしませんでした。18歳の時に、社長と2人の従業員しかいない零細企業の北村製作所に就職してから、70歳で東亜工器を引退するまで、町工場でコツコツと50年間、旋盤工の仕事をやり続けてきたのです。自分が選び取ったキャリアに自信と誇りを生涯持ち続けることができた、小関さんのような人物が有する精神的世界を、わたくしは“仕事を生き甲斐とする近代人のエートス”と呼ぶことにします。

### 〔C〕 地域的労働市場 (Regional Labor Market) の特徴

東京都大田区の城南地域は、中小企業の産業集積を特徴としています。港区・品川区の臨海部に始まり川崎・鶴見に至る、長く带状に続く京浜工業地帯の丁度まんなかあたりに、城南の産業クラスターは位置していま

す。もちろん大田区城南の域内にも、東京計器、山武ハネウェル、荏原製作所、ニコン、キャノンなど、大企業の大きな工場がいくつか存在していますが、この地域の工場の大半は従業員30名以下の町工場ですので、城南地域の産業クラスターは、マーシャルが産業集積に対して与えた定義〔“ある特定の地区に同種の小企業が多数集積すること”〕に、ピッタリ一致しているといつてよいでしょう。

〔注〕 マーシャルは『原理』において、一貫して集積をコンセントレーション (concentration) と表現しており、クラスター (cluster) という最近頻繁に使用されている用語を用いていません。

中小企業の地域的な集積としての産業クラスターは、中小企業に雇用されている労働力の地域的な集積として捉えることもできます。資本と労働は、メダルの表と裏のような関係にある、相互に依存しあって存在している生産の担い手〔agent of production, 生産要素〕に他なりません。従つて産業クラスターを分析する場合にも、設備や技術のような資本的な側面からのアプローチだけでは不十分なのであつて、工場で働いている労働者の側面からのアプローチも必要不可欠なのです。産業クラスターを、労働力の地域的な集積という角度から見た場合、それは、地域的労働市場 (regional labor market) と呼ぶことができます。産業クラスターが生成し持続していくためには、マーシャルが強調している通り、地域的労働市場の存在が不可欠なのです。

ところで地域的労働市場といった場合、肝心要の“地域”の範囲は、一体何によつて決められるのでしょうか。答はすこぶる単純で、“地域”の範囲はもつぱら勤労者の自宅からの通勤時間によつて画されている、とわたくしは考えています。地域的労働市場の空間的な境界は、住居から職場への通勤距離と通勤時間によつて画されているのです。

- \* 大森・蒲田地域の場合、この地域を自ら歩き廻った経験から大雑把に判断すると、片道30～40分程度、通勤距離ではJR大森駅から半径4 kmの円周内が、地域的労働市場の空間的範囲であるように思われます。

わが国における地域的労働市場研究の先駆者は、東京大学社会科学研究所の教授であった氏原正次郎である、といっても異論はないと思われます。氏原は、労働調査によって労働問題を実証的に研究することの重要性を強調し、自ら精力的に労働調査を行ってきました。氏原が中心になって行われた労働調査の中で、今日においても依然として学術的な価値を失っていない調査として高く評価されているのは、1951年（昭和26年）から1953年（昭和28年）にかけて3年余の歳月をかけて行われた、京浜工業地帯の産業労働調査であるといえるでしょう。

神奈川県は昭和26年に、朝鮮戦争下で復興の兆しを見せていた京浜工業地帯に関する産業調査を大河内一男東大経済学部教授に委託しましたが、学部教授であった大河内は講義などで多忙であったために、門下の氏原（社会科学研究所）に調査を担当させることになったようです。したがってこの調査のうち労働調査の部分は、ほとんど氏原一人の手によって行われることになりました。

神奈川県が企画した京浜工業地帯の調査は、立地条件ならびにインフラストラクチャーに関する調査と、住宅および労働市場に関する調査の2つの調査から構成されていました。前者の調査は、鯨島茂に委託されたのに対し、後者は大河内一男に依頼されることになったわけです。住宅と労働市場に関する調査報告書は、謄写印刷のものを除くと以下の2冊でありましたが、核心となる部分はすべて氏原の手によって書かれたものと思われます。（なぜなら報告書(2)の『京浜工業地帯調査報告書——産業労働篇各論』の第2篇と補論は、氏原の著書『日本労働問題研究』（1966年）にほぼ原形のまま再録されているからです。）

- (1) 『京浜工業地帯調査報告書——産業労働篇総論』(1952年)
- (2) 『京浜工業地帯調査報告書——産業労働篇各論』(1954年)

\* 京浜工業地帯調査の全体を総括する報告書として発表されたのが、『神奈川県産業構造の基本問題』(神奈川県, 1951年)であり, 鮫島茂が担当した立地条件調査の報告書は、『京浜工業地帯の実態——工場立地篇』(神奈川県, 1953年)として公表されました。

この2冊からなる調査報告書の中で, 地域の労働市場の分析に当てられているのは(2)の『京浜工業地帯調査報告書——産業労働篇各論』(以下『各論』と略すことにします)の方でした。調査対象となった地域は, 神奈川県の川崎・鶴見地区に限定されていますが, 報告書の分析と内容は, “京浜工業地帯”全体を包括する形で行われているといえます。『各論』は, 京浜工業地帯で働いている工場労働者の出身地が, 関東・東北・甲信越にまで広範に拡散している点に注目して, “労働市場の地域的開放性”という注目すべき概念を導き出しています。『各論』は次のように述べています。

「この労働市場の地域的開放性については, 産業別, 規模別に若干の相違点がみられる。産業別については, すでに第2篇でふれた。その要点は, この開放性が, 金属工業, 化学工業, 機械工業の順で, 漸次, せまくなるということであった。この開放性が工場の規模によってどのようにちがっているかは, 第1表の男子労務者の出身地にみるごとくである。いま, 神奈川県および東京都を第一次的な地域労働市と考えると, 30人未満で45.1%, 30人~99人では51.4%, 100人~499人では40.9%, 500人以上では38.3%がこの地域の出身者である」(『各論』122~23頁)

『各論』で用いられている地域労働市場という概念は、労働の需要と供給が交差しあう経済空間なのではなく、労働者の出身地すなわち氏原のいわゆる労働力の“給源”をも含んだ極めて広大な空間を意味していたといっただけであろう。しかしこれでは、地域労働市場の範囲があまりにも広くなりすぎてしまうために、地域的労働市場という分析概念（分析道具）が著しく無内容なものになってしまうおそれがあります。そこで氏原は、“神奈川県および東京都を第一次的な地域労働市場と考えると”と述べ、第一次的、第二次的といった、意味するところのものがはなはだ曖昧でわかりにくい形容詞をくっつけることによって、地域労働市場概念の有効性をなんとか保持しようとしたのです。

労働の供給 (labor supply) と労働の“給源” (labor reservoir) は、明確に区別するべきであるという画期的な提言を、始めて行った人がほかならぬ氏原なのでした。しかしこの氏原の提言は、『各論』において生かされているとはいえません。“給源”という概念は、農村（農業）から都市（商工業）への人口移動を分析する際に、絶大な威力を発揮することができる有益な分析概念とみなすことができます。労働力の“給源”論は、トダローの人口移動論に見られるように、開発経済学の分野においては、現在においてもなお賞味期限の切れてはいない利用可能な概念として重要視されています。

地域労働市場の範囲は、前述したように、職場と住宅との距離すなわち通勤可能な距離と時間によって画されるべきであって、労働者の出身地すなわち“給源”にまで市場の範囲を拡大してはならないのです。

『各論』に展開されている地域的労働市場論の第一の欠陥は、労働市場の中に労働市場の給源を入れてしまったことにあります。このような欠陥は氏原に限られたことではなく、多くのレイバー・エコノミストに広く共有されている欠陥といってもよいかと思われます。例えば無制限労働供給

論で有名なアーサー・ルイスによると、生存最低限の生活水準で暮らしている農村人口は、すべて無制限な“労働供給”そのものであるということになっています。労働市場の“給源”までをも労働市場に含めてしまうと、労働市場概念はたちまちのうちに大混乱に陥らざるをえません。

『各論』に展開された地域的労働市場論の第2の欠陥は、京浜工業地帯において入職した工業労働者の熟練形成過程が、十分に調査されなかったことです。この第2の欠陥こそが、じつは第1の欠陥を生み出した根本的な原因であったともいえるのです。

労働市場分析において用いられる“労働供給”という言葉には、3つの意味が含まれています。(1)新規の入職、(2)OJT（職場内訓練）とOFF-JT（職場外訓練）あるいは仕事（労働経験）を通じて得られる技能の向上、(3)企業間労働移動、の3つがそれです。労働経済学の最近の教科書では、人的投資理論の影響によるのでしょうか、(1)~(3)のすべてを人的投資とみなしています。職業教育は、入職の準備教育とみなすことができますので、職業高校生は入職の準備をしている潜在的労働者といってよいでしょう。

“労働供給”を今日風に定義するとすれば、それは、キャリアの準備と形成、およびキャリア・アップの努力のすべて、と定義できるのではないのでしょうか。小関さんのケースについて見てみますと、18歳で北村製作所に見習工として就職した時点が“入職”にあたります。その後小関さんは、いくつかの工場を“渡り”歩きますが、この“渡り”の時期が旋盤工としてのキャリア形成とキャリア・アップの時期であったといえるでしょう。キャリア形成が一段落して、一人前の熟練工として仕事を行い賃金が稼げるようになってから以降も、リストラや倒産などによって他の企業へ移動を余儀なくされる場合がしばしばありますが、労働移動の頻度は急速に低下していくのが普通です。小関さんも、40歳になる直前に勤め先の扶桑製作所が倒産してしまったために、しばらく失業を余儀なくされたわけ

ですが、失業期間を利用してNC工作機械の操作法を勉強しました。そして、あたらしいNC工作機械で装備された当時の中小企業にしては極めてハイカラな町工場の東亜工器に再就職したのです。それから70歳で引退するまで約30年間、小関さんは東亜工器を離れることはありませんでした。

『各論』は、日本の大企業における“わが国特有の労務管理政策”にもとづいて形成され、“基幹工”の養成を中心的な課題として組み立てられている“年功的職場秩序”〔年功制度〕に関して、比較的詳細な分析を行っています。“年功的職場秩序”（内部昇進制）のもとで養成されていく労働者の熟練技能について、『各論』は以下のように述べているのです。

「また、このようにして養成された労働者の技能は、多くの場合、どこの同種の企業でも、充分その能力を発揮し得るような社会的通用性をもっていない。そうだとすれば、これらの労働者が特定企業に固定されるのは、当然であるといってよい」（『各論』、141頁）

『各論』は、中小企業の労働市場について、大企業の“企業的労働市場”から分断されているために、両市場は「それぞれ相対的に独立した労働市場」になってしまっているという。すなわち、それぞれの労働市場が封鎖性を強くもっているがために、単一の地域的労働市場を形成していないというのです。中小企業労働者の技能形成に関して、『各論』はまったく言及していませんが、とりあえず以下の2つの文章から推論をしていくことにしましょう。

- (1) 「中小企業の労働者の中には、未経験で雇用されて熟練工にならない前に職業転換を行い、やめてゆくものが、相対的に多い。それに比べて、一度熟練工になったものは、企業をかわっても職業をかえる程

度は少ないと考えられる」(『各論』, 142頁)

- (2) 「臨時工の労働市場はどちらかといえば、中小工場労働市場と類似である。中小工場労働者は、それ自体臨時工的だからである」(『各論』, 143頁)

『各論』に描かれた中小企業労働市場のイメージは、低熟練の労働者が圧倒的に多く、臨時工労働市場と同様に労働力の流動性がきわめて高い労働市場であるとみなされています。ごくわずかの熟練工でさえも、職種を変更することは少ないけれども、流動性が高い点においては“臨時工的”な性格を色濃くもっている労働者と類似の者と見なされているのです。

結論を急ぐことにしたい。

ようするに『各論』は、「京浜工業地帯の労働市場の背景または周辺には、先に規定したごとき潜在的過剰労働力の膨大なプールが存在し、そこから不断に労働力の供給が行われている」(『各論』, 126～127頁)が故に、企業は、熟練工の外部労働市場に依存することが不可能なのであり、みずから“基幹工”を内部養成しなければならなくなった、というのです。中小企業労働市場は、中小企業には基幹工を内部養成する経営基盤が欠如しているため、低熟練の“臨時工的”な労働者からなる流動的な労働市場にならざるをえないという。かくして日本には、クラフト・ユニオンの基盤となるような、熟練工の労働市場が形成されることはなかった、ということになるのです。

「西欧の労働者に共通した“仕事と賃金”の意識、いいかえれば自分の職業を天職と感じ自分の獲得した熟練にたいして誇をもつ、そしてこの熟練にあたいする社会的経済的評価を要求する意識……」が、日本の労働者には欠けざるを得ないというのです。(『各論』, 124頁)

この文章は、氏原の書いた文章の中で、もっとも張りのある雄渾な文章だと思われまゝす。しかし、このような『各論』の労働市場分析は基本的に誤っていたのではないか、とわたくしには考えられるのです。

大田区の城南地域に展開していた地域労働市場は、『各論』に描かれた労働市場とはまったく異なる、どちらかと言えば“クラフト・ユニオンの基盤”となるような労働市場であったとわたくしには思われまゝす。

(2004年11月15日, 脱稿)

Labor Writer Tomohiro Koseki and the  
Machi-kohba's World (Part 5)

Susumu HAGIWARA

《Abstract》

Tomohiro Koseki is a well-known labor writer who has been working as a skilled machinist for over forty years in Tokyo. He has published many books in which the life and work of factory workers in small factories at Kamata and Ohmori are described very vividly and in depth. These publications can be regarded as an excellent collection of labor history documents in the post-war Japan.

The article attempts to describe the career patterns of skilled factory workers in Tokyo by utilizing the Koseki's writings. A small factory in town is called "machi-kohba" in Japanese. The article focuses upon two specific points that are career-patterns of machi-kohba workers and their skill formation processes. This article covers the second section in the second chapter.